

# 幼児の仲間関係に関する研究：ソシオメトリック地位の2年間にわたる持続と変動

前田 健一

(幼児心理研究室)

(平成9年4月30日受理)

## A study of peer relations in young children : Continuities and changes of sociometric status across a two-year period

Kenichi MAEDA

子どもの仲間関係と社会的適応に関する研究では、子どもの社会的適応状態や社会的コンピテンスの基準測度として、あるいは社会的スキル訓練の対象児を選出するスクリーニング測度やスキル訓練の成果を評価する結果測度として、ソシオメトリック法が頻繁に使用されている(McConnell & Odom, 1986)。ソシオメトリック法は指名法、評定法、一対比較法に大別されるが、一対比較法は時間や労力を要することから、多くの研究はもっぱらソシオメトリック指名法と評定法を使用してきた。指名法では「一緒に遊びたい友だち」(肯定的指名)、反対に「あまり一緒に遊びたくない友だち」(否定的指名)などの特定の選択基準に従って、子どもは該当する仲間名を一定数(通常は3名以内が多い)だけ指名するように求められる。仲間から受けた肯定的指名得点は子どもの仲間集団内における人気度をあらわし、否定的指名得点は拒否度をあらわす。従来の研究では肯定的指名得点と否定的指名得点が必ずしも高い負相関を示さないことから、両得点はそれぞれ異なる側面を捉える二次元の測度であると考えられている。それに対して、評定法では「どの程度一緒に遊びたいか」などの一次元尺度に基づいて、子どもは仲間全員を3段階または5段階で評定するように求められる。通常は仲間全員から受けた評定値を仲間1人当たりの平均評定値に換算し、仲間からの全般的な受容度をあらわす指標としている。

評定法の利点は指名法の得点よりも、テスト-再テスト間の安定性が高いことである(たとえば, Asher, Singleton, Tinsley, & Hymel, 1979)。しかし、評定法は一次元の評定尺度を使用するので、子どもが仲間全員から受容されている程度を正確に反映するが、拒否児や無視児の地位を区別できないという弱点がある。それに対して、指名法では肯定的指名得点と否定的指名得点の両得点を使用し、二次元分類システムを適用すると、子どもを人気児、拒否児、

無視児、平均児、両論児などの地位群に分類できる。このような指名法の利点から、二次元分類システム (Coie, Dodge, & Coppotelli, 1982; Newcomb & Bukowski, 1983) の開発以後の研究は、ほとんどが指名法を使用して地位群を分類し、人気児や平均児との比較を通して拒否児や無視児の特徴を明らかにしてきた (Coie, Dodge, & Kupersmidt, 1990; Hymel & Rubin, 1985; Newcomb, Bukowski, & Pattee, 1993)。それらの研究によると、全般に拒否児は積極的に仲間と相互作用をするが、相互作用の質が不適切であり、攻撃的であることが多い。また、社交性に乏しく、社会的スキルや認知的スキルが未熟である。それに対して、無視児はおとなしく、仲間との相互作用や会話が少ない。自分から仲間の遊びに仲間入りすることも少なく、一人遊びが多い。攻撃的な行動はほとんど示さないが、向社会的スキルも少ない。こうした拒否児と無視児の特徴差と関連して、拒否児の地位は長期的に維持されやすいが、無視児の地位は比較的变化しやすいことが報告されている (Coie & Dodge, 1983)。

Coie & Dodge (1983) は、小学3年生と5年生を対象にして、毎年1回ずつソシオメトリック指名法を実施し、4年間にわたる地位の維持者率と変動者率を調べている。それによると、人気児の地位維持者率は1年間で36%、2年間で28%、3年間で34%、4年間で21%となり、期間が長くなるにつれて少し低下するものの、長期的に安定していた。拒否児の地位維持者率も1年間で45%、2年間で34%、3年間で34%、4年間で30%となり、人気児以上に長期的な安定性が高かった。それに対して、無視児の地位維持者率は1年間で25%、2年間で27%、3年間で22%、4年間で24%となり、1年間の期間だけを見ても人気児や拒否児よりも維持者率は低かった。Vitaro, Gagnon, & Tremblay (1990) は、Coie & Dodge (1983) よりも年少児を対象としているが、拒否児の地位維持者率しか報告していない。それによると、幼稚園児時点における拒否児の約35%が小1時点においても拒否児の地位を維持していた。前田 (1995) の研究Ⅱは、Vitaro, Gagnon, & Tremblay (1990) と同様に幼稚園の年長児時点から小1時点にかけての移行期に焦点を当て、各地位群の同一地位維持者率を調べている。その結果、小1時点における人気児の58%、拒否児の45%、平均児の43%、無視児の10%がそれぞれ幼稚園の年長児時点から同一地位を維持していた。これらの研究結果はそれぞれ同一地位維持者率に多少の相違はあるものの、幼稚園から小学校を経て中学校に至る発達段階を通じて、人気児や拒否児は同一の地位を維持しやすく、無視児の地位は変化しやすいことを確証するものである。

幼稚園から小1の移行期においてさえ、人気児や拒否児の地位が維持されやすいことから、さらに年少の幼児期においても、人気児や拒否児の地位はいったん確立すると維持されやすい可能性が示唆される。しかし、地位の維持者率や変動者率を検討した研究は二次元分類システム (Coie, Dodge, & Coppotelli, 1982; Newcomb & Bukowski, 1983) の開発以後の研究であるためか、幼児期における地位の維持者率と変動者率を検討した研究はまだ少ない。前田 (1995) の研究Ⅰは幼児期に焦点を当てた数少ない研究の1つである。それによると、幼稚園の年長児時点における人気児の35%、拒否児の54%、平均児の22%、無視児の20%がそれぞれ年中児時点から同一地位を維持していた。この結果は、上述の研究結果と同様に、幼児期においても拒否児の地位維持者率が高いことを示すものである。しかし、前田 (1995) の研究Ⅰは幼児期の1年間にわたる地位の維持者率を確かめたものであり、その前後の半年間や1年半の期間については確かめていない。

本研究では、前田 (1995) の研究Ⅰよりも対象幼児数を増やして、前田 (1995) の研究Ⅰの結果の一般性を確認する。さらに、幼稚園の年中児時点から年長児時点にかけて約半年間ずつ

の期間をはさんで、合計4回のソシオメトリック調査を実施した。それぞれのソシオメトリック測定時点ごとに幼児を5つの地位群に分類し、約半年間、約1年間、約1年半の期間の3期間にわたる時間経過に伴う同一地位の維持者率を算出し、どの地位群の維持者率が高いかを比較検討することにした。あわせて、地位の変動が生じる場合には、どのような変動パターンが多いのかについても検討を加えた。なお、幼児を対象とした従来の研究では地位分類をしないで、ソシオメトリック地位得点についてテスト-再テスト間の安定性係数を算出したものが多い。そこで本研究では、肯定的指名得点、否定的指名得点、社会的好み得点、社会的影響力得点、平均評定値の5つのソシオメトリック地位得点について各期間ごとの安定性係数を算出し、これらの研究結果と比較検討することにした。

## 方 法

**対象児** 幼稚園の年中児時点から年長児時点にかけてのデータが揃っている124名（A集団の62名とB集団の62名）を対象とした。表1は、A集団とB集団の年中児時点から年長児時点にわたる4回の各テスト時点別に、男女全体の人数、平均月齢、月齢範囲およびテスト実施日を示したものである。

表1 対象幼児集団の人数（男女全体）、平均月齢、月齢範囲、テスト実施日

		年中児時点		年長児時点	
		1回目	2回目	3回目	4回目
A集団	人数	62	62	62	62
	平均月齢	58.26	63.16	70.34	75.42
	月齢範囲	52~63	56~68	64~75	69~80
	実施日	6/20~7/2	11/21~11/25	6/26~7/3	11/28~12/4
B集団	人数	62	62	62	62
	平均月齢	57.13	62.16	68.19	74.86
	月齢範囲	51~63	56~68	62~74	69~80
	実施日	6/26~6/30	11/28~12/4	6/1~6/6	12/11

**材 料** (1)幼児の個別カラー写真カード：各テスト時点の写真ソシオメトリック指名法と評定法では、各幼児の個別カラー写真を使用した。写真は、一人で壁を背に立っている姿を正面から撮影し、胸から上の部分を縦5cm×横4cmの大きさにプリントした。さらに、各写真を縦6.5cm×横5cmの白色厚紙に貼り付けて個別写真カードを作成した。

(2)分類箱：各テスト時点の写真ソシオメトリック評定法では、3つの分類箱を使用した。各箱は底面積が12cm×12cm、3つの側面の高さが5cm、残り1側面の高さが12cmの蓋のない容器形であった。各箱には、高さ12cmの側面の内側面に、それぞれ3色の画用紙に描いたハッピーな顔（ピンク色）、ニュートラルな顔（黄色）、悲しそうな顔（青色）の表情略線画が貼り付けてあった。

**手続き** 各テスト時点別に、以下の順に個別面接で実施した。(1)写真と名前の確認：対象児と同一クラスの同性仲間全員の写真カードを取り出し、机上にほぼランダムな順に縦4枚×横4枚に配列して対象児に提示した。この後、各写真カードを1枚ずつ順に指さし、「この子は

誰ですか」と写真の仲間名を質問し、仲間の名前と写真を一致させ得るか否かを確認した。仲間の名前を言えない幼児には、その写真の子どもの名前を教えた。しかし、実際に教える必要はほとんどなかった。

(2)写真ソシオメトリック指名法：対象児の写真カードを除く残りの同性仲間全員の写真カードを机上にはぼランダムな順に縦4枚×横4枚に配列して提示し、次の質問をしながら肯定的指名を3名以内まで選ばせた。「この中で、○○ちゃん（対象児名）が幼稚園で遊ぶとき、1番目に（2番目に、3番目に）一緒に遊びたい人は誰ですか。」肯定的指名が終了した後、同様の手順で次の質問をしながら、否定的指名を3名まで選ばせた。「今度はこの中で、○○ちゃんが幼稚園で遊ぶとき、1番目に（2番目に、3番目に）一緒に遊びたくない人は誰ですか。」

(3)写真ソシオメトリック評定法：まず机上に3つの分類箱を横一列に配置した。対象児から見て右側にハッピーな顔の箱、左側に悲しそうな顔の箱、中央にニュートラルな顔の箱を置いた。ニュートラルな顔の箱を中央に置いた方が分類しやすいと考え、どの対象児にも箱の提示位置を一定にした。対象児の写真カードを除く残りの同性仲間全員の写真カードをほぼランダムな順に束ねた後、次の教示を与えて写真カードを1枚ずつ対象児に手渡していった。「今度は、△△組（対象児の組名）のお友だちの写真を1枚ずつ○○ちゃんに渡します。○○ちゃんは、写真のお友だちをよく見て、○○ちゃんが幼稚園で一緒に遊びたい子だなあとと思ったら、この箱（ハッピーな顔の箱）に入れて下さい。遊びたくない子だなあとと思ったら、この箱（悲しそうな顔の箱）に入れて下さい。遊びたいか遊びたくないかわからないなあとと思ったら、この箱（ニュートラルな顔の箱）に入れて下さい。それでは、この写真の子はどの箱に入れますか？」

**得点化の方法** (1)ソシオメトリック指名法の得点：各テスト時点別に、まず対象児ごとに仲間から受けた肯定的指名数と否定的指名数をそれぞれ集計した。肯定的指名数と否定的指名数のそれぞれの合計数について対象児本人を除くクラスの同性仲間数で除算し、仲間1人当りからの指名数を算出した。その後、男女別に2クラス全体の平均値とSDに基づいて標準得点へ変換した。次に、この2つの標準得点（肯定的指名得点=L得点、否定的指名得点=D得点）から、社会的好み得点（ $SP=L-D$ ）と社会的影響力得点（ $SI=L+D$ ）を算出した。L得点は仲間から積極的に好かれている程度を、D得点は仲間から積極的に拒否されている程度をあらわす。SP得点とSI得点はそれぞれL得点とD得点の合成得点であるが、SP得点は好かれる程度と拒否される程度の差（距離）をあらわし、SI得点は好かれるか拒否されるかにかかわらず仲間への影響力が強く、仲間の中で無視できない存在である程度をあらわす。

(2)ソシオメトリック評定法の得点：各テスト時点別に、仲間からハッピーな顔の箱に分類された場合に評定値3を、ニュートラルの顔の箱に分類された場合に評定値2を、悲しそうな顔の箱に分類された場合に評定値1を配点し、評定値の合計を対象児ごとに求めた。その後、仲間から受けた評定値の合計得点を評定した仲間の人数で除算し、平均評定値を算出した。この平均評定値は、仲間から受容される程度をあらわす一次元的な指標と考えられている（Hughes, 1990 ; Hymel & Rubin, 1985）。

**地位分類の方法** 地位群の分類は、Coie & Dodge (1988) の分類方法に従った。各テスト時点別に、写真ソシオメトリック指名法のL得点、D得点、SP得点およびSI得点に基づいて各対象児を5つの地位群のいずれかに分類した。各地位群の分類基準は、表2に示すとおりである。人気児は多くの仲間から好かれ、拒否されることの少ない幼児たちである。拒否児は

表2 各回のテスト時点における地位群分類の人数内訳

地位群	分類基準	年中児時点		年長児時点		計
		1回目	2回目	3回目	4回目	
人気児	$SP > 1, L > 0, D < 0$	19(17)	21(20)	15(19)	17(16)	72( 72)
拒否児	$SP < -1, L < 0, D > 0$	15(17)	18(15)	16(17)	12(17)	61( 66)
平均児	$-1 < SP < 1, -1 < SI < 1$	13(17)	18(18)	18(21)	21(21)	70( 77)
無視児	$SI < -1, L < 0, D < 0$	10( 9)	4( 8)	10( 4)	10( 7)	34( 28)
両論児	$SI > 1, L > 0, D > 0$	5( 2)	1( 1)	3( 1)	2( 1)	11( 5)
計		62(62)	62(62)	62(62)	62(62)	248(248)

( ) 外は男児の人数, ( ) 内は女児の人数

人気児と反対の傾向を示し、多くの仲間から拒否されやすい幼児たちである。平均児は好かれる程度も拒否される程度も平均的な幼児たちである。無視児は好かれることも拒否されることも少ない幼児たちである。なお両論児は、ある仲間からは好かれるが別の仲間からは拒否される幼児たちである。いわば、仲間の意見が賛否両論に分かれる幼児たちである。

## 結 果

### ソシオメトリック地位得点の安定性

表3は、ソシオメトリック指名法のL得点、D得点、SP得点、SI得点および評定法の平均評定値のそれぞれについて、1回目から4回目の各テスト時点間の相関係数をまとめたものである。表3から、いずれの得点も有意な正相関を示し、地位得点はいずれのテスト期間にわたっても比較的高い安定性を示していることがわかる。

(1)同一テスト期間における異なる得点間の比較 表3の相関値を横に比較してみると、SI得点の相関値は他の4つの得点の相関値よりも低いことがわかる。相関値の差の検定をしたところ、約半年間の期間を経た1回目→2回目間ではL得点、D得点、SP得点および平均評定値の各相関値がSI得点の相関値よりも有意に高く(順に $z = 2.60, p < .01$ ;  $z = 3.57, p < .01$ ;  $z = 4.12, p < .01$ ;  $z = 4.42, p < .01$ )、平均評定値の相関値がL得点の相関値よりも高い傾向にあった( $z = 1.82, p < .10$ )。2回目→3回目間でもL得点、D得点、SP得点および平均評定値の各相関値がSI得点の相関値よりも有意に高かった(順に $z = 3.45, p < .01$ ;  $z = 3.10, p < .01$ ;  $z = 4.35, p < .01$ ;  $z = 4.49, p < .01$ )。3回目→4回目間でもL得点、D得点、SP得点および平均評定値の各相関値がSI得点の相関値よりも有意に高く(順に $z = 3.18, p < .01$ ;  $z = 3.46, p < .01$ ;  $z = 4.72, p < .01$ ;  $z = 4.90, p < .01$ )、平均評定値の相関値がL得点の相関値よりも高い傾向にあった( $z = 1.72, p < .10$ )。

約1年間の期間を経た1回目→3回目間でもL得点、D得点、SP得点および平均評定値の各相関値がSI得点の相関値よりも有意に高く(順に $z = 2.12, p < .05$ ;  $z = 2.75, p < .01$ ;  $z = 3.30, p < .01$ ;  $z = 4.02, p < .01$ )、平均評定値の相関値がL得点の相関値よりも高い傾向にあった( $z = 1.90, p < .10$ )。同様に、2回目→4回目間でもL得点、D得点、SP得点および平均評定値の各相関値がSI得点の相関値よりも有意に高く(順に $z = 2.40, p < .05$ ;  $z = 3.49, p < .01$ ;  $z = 3.97, p < .01$ ;  $z = 4.78, p < .01$ )、平均評定値の相関値が

L得点の相関値よりも有意に高かった ( $z=2.38, p<.05$ )。

最後に約1年半の期間を経た1回目→4回目間ではD得点やSP得点の相関値がSI得点の相関値よりも有意に高く (順に  $z=2.17, p<.05$ ;  $z=2.40, p<.05$ )、平均評定値の相関値がSI得点の相関値よりも高い傾向にあった ( $z=1.94, p<.10$ )。

(2)同一得点における異なるテスト期間の比較 表3の相関値を縦に比較してみると、テスト期間の間隔が短いほど相関値は高い傾向にあることがわかる。相関値の差の検定をしたところ、L得点の相関値では2回目→3回目間 ( $r=.587$ ) が1回目→3回目間 ( $r=.462$ ) や2回目→4回目間 ( $r=.484$ ) よりも高い傾向にあった (順に  $z=1.88, p<.10$ ;  $z=1.79, p<.10$ )。また、3回目→4回目間 ( $r=.650$ ) が1回目→3回目間 ( $r=.462$ )、2回目→4回目間 ( $r=.484$ )、1回目→4回目間 ( $r=.482$ ) のそれぞれよりも有意に高かった (順に  $z=2.67, p<.01$ ;  $z=2.66, p<.01$ ;  $z=2.37, p<.05$ )。D得点の相関値では1回目→2回目間 ( $r=.641$ ) が1回目→3回目間 ( $r=.524$ ) よりも高い傾向にあった ( $z=1.83, p<.10$ )。また、3回目→4回目間 ( $r=.672$ ) が1回目→3回目間 ( $r=.524$ ) よりも有意に高く ( $z=2.37, p<.05$ )、2回目→3回目間 ( $r=.558$ ) や1回目→4回目間 ( $r=.564$ ) よりも高い傾向にあった (順に  $z=1.81, p<.10$ ;  $z=1.71, p<.10$ )。SP得点の相関値では1回目→2回目間 ( $r=.683$ ) が1回目→3回目間 ( $r=.569$ ) よりも有意に高く ( $z=1.99, p<.05$ )、1回目→4回目間 ( $r=.580$ ) よりも高い傾向にあった ( $z=1.74, p<.10$ )。また、2回目→3回目間 ( $r=.657$ ) が1回目→3回目間 ( $r=.569$ ) よりも高い傾向にあった ( $z=1.67, p<.10$ )。さらに、3回目→4回目間 ( $r=.748$ ) が1回目→3回目間 ( $r=.569$ )、2回目→4回目間 ( $r=.619$ )、1回目→4回目間 ( $r=.580$ ) のそれぞれよりも有意に高く (順に  $z=3.22, p<.01$ ;  $z=2.62, p<.01$ ;  $z=3.03, p<.01$ )、2回目→3回目間 ( $r=.657$ ) よりも高い傾向にあった ( $z=1.79, p<.10$ )。SI得点の相関値では、いずれのテスト期間の間にも有意差はなかった。平均評定値の相関値では3回目→4回目間 ( $r=.757$ ) が1回目→3回目間 ( $r=.625$ ) や1回目→4回目間 ( $r=.540$ ) よりも有意に高く (順に  $z=2.38, p<.05$ ;  $z=4.12, p<.01$ )、2回目→3回目間 ( $r=.673$ ) や2回目→4回目間 ( $r=.679$ ) よりも高い傾向にあった (順に  $z=1.95, p<.10$ ;  $z=1.74, p<.10$ )。また、1回目→4回目間 ( $r=.540$ ) は1回目→2回目間 ( $r=.695$ )、2回目→3回目間 ( $r$

表3 同一得点の安定性係数 (N=124)

	L得点	D得点	SP得点	SI得点	平均評定値
①約半年間の時間経過					
1回目→2回目	.555***	.641***	.683***	.294***	.695***
2回目→3回目	.587***	.558***	.657***	.229**	.673***
3回目→4回目	.650***	.672***	.748***	.351***	.757***
(相関値の平均)	(.597)	(.624)	(.696)	(.291)	(.708)
②約1年間の時間経過					
1回目→3回目	.462***	.524***	.569***	.224**	.625***
2回目→4回目	.484***	.580***	.619***	.212**	.679***
(相関値の平均)	(.473)	(.552)	(.594)	(.218)	(.652)
③約1年半の時間経過					
1回目→4回目	.482***	.564***	.580***	.340***	.540***

\*\* :  $p<.02$  \*\*\* :  $p<.001$

=.673), 2回目→4回目間 ( $r = .679$ ) よりも有意に低く (順に  $z = 3.01, p < .01$ ;  $z = 2.05, p < .05$ ;  $z = 2.65, p < .01$ ), 1回目→3回目間 ( $r = .625$ ) よりも低い傾向にあった ( $z = 1.82, p < .10$ )。

ソシオメトリック地位得点の相互相関

表4は、各テスト時点別にL得点、D得点、SP得点、SI得点および平均評定値の5つの得点相互の相関係数をまとめたものである。表4から、いずれのテスト時点においてもL得点はD得点と有意な負相関を、SP得点、SI得点、平均評定値のそれぞれと有意な正相関を示している。L得点が高く仲間から積極的に好かれる幼児ほど、仲間から積極的に拒否されることが少なく、仲間から受容される程度も高い関係にある。それに対して、D得点はSP得点や平均評定値と有意な負相関を示し、SI得点と有意な正相関を示している。D得点が高く仲間から積極的に拒否される幼児ほど、仲間から受容される程度も低い関係にあるが、仲間への影響力は高い関係にある。SP得点はL得点からD得点を減算した合成得点であることから、L得点とは正相関を示し、D得点とは負相関を示すことがわかる。また、SI得点はL得点とD得点を加算した合成得点であることから、L得点ともD得点とも正相関の関係になることがわかる。しかし、SP得点とSI得点との相関はいずれのテスト時点とも無相関に近く、これら2つの得点が相互に独立の側面を捉えていることを示している。SP得点と平均評定値の相関値は、いずれのテスト時点でも高い正相関を示している。前者は指名法の合成測度であり、後者は評定法の測度であるという相違はあるけれども、両得点間の高い正相関から、両得点は類似した側面を捉えていると考えられる。

表4の相関値を横に比較しながら、相関値の差の検定を行い、各得点間の相関値の大きさがテスト時点によって異なるか否かを検討した。その結果、L得点と平均評定値の相関値では、2回目の相関値 ( $r = .771$ ) が1回目 ( $r = .590$ ), 3回目 ( $r = .639$ ), 4回目 ( $r = .592$ ) のそれぞれよりも有意に高かった (順に  $z = 2.66, p < .01$ ;  $z = 2.04, p < .05$ ;  $z = 2.66, p < .01$ )。同様に、SP得点と平均評定値の相関値でも2回目の相関値 ( $r = .878$ ) が1回目 ( $r = .781$ ), 3回目 ( $r = .802$ ), 4回目 ( $r = .793$ ) のそれぞれよりも有意に高かった (順に  $z = 2.57, p < .05$ ;  $z = 2.15, p < .05$ ;  $z = 2.37, p < .05$ )。

表4 各回のテスト時点における各得点間の相関係数 (N=124)

	1回目	2回目	3回目	4回目
L得点-D得点	-.517***	-.614***	-.600***	-.524***
L得点-SP得点	.871***	.899***	.899***	.876***
L得点-SI得点	.492***	.447***	.487***	.507***
L得点-平均評定値	.590***	.771***	.639***	.592***
D得点-SP得点	-.871***	-.897***	-.889***	-.870***
D得点-SI得点	.491***	.432***	.406***	.468***
D得点-平均評定値	-.771***	-.806***	-.800***	-.795***
SP得点-SI得点	.001	.010	.056	.030
SP得点-平均評定値	.781***	.878***	.802***	.793***
SI得点-平均評定値	-.183*	-.033	-.145	-.190*

\* :  $p < .05$  \*\*\* :  $p < .001$

## ソシオメトリック地位分類の結果

表5は、各テスト時点別に表2の分類基準に基づいて分類した各地位群の人数内訳（男女合計数）とその比率（％）を示したものである。各テスト時点別に、 $\chi^2$ 検定を使用して5つの地位群の人数分布に差があるか否かを検討した。その結果、1回目では $\chi^2(4)=22.37$ ,  $p < .001$ で有意であった。残差分析をしたところ、人気児は有意に多く（ $p < .05$ ）、両論児は有意に少なかった（ $p < .01$ ）。2回目では $\chi^2(4)=45.92$ ,  $p < .001$ で有意となり、人気児や平均児は有意に多く（順に $p < .01$ ,  $p < .05$ ）、拒否児は多い傾向にあり（ $p < .10$ ）、無視児や両論児は有意に少なかった（いずれも $p < .01$ ）。3回目では $\chi^2(4)=36.40$ ,  $p < .001$ で有意となり、2回目と同様に人気児や平均児は有意に多く（順に $p < .05$ ,  $p < .01$ ）、拒否児は多い傾向にあり（ $p < .10$ ）、無視児や両論児は有意に少なかった（順に $p < .05$ ,  $p < .01$ ）。4回目では $\chi^2(4)=36.97$ ,  $p < .001$ で有意となり、平均児は有意に多く（ $p < .01$ ）、両論児は有意に少なかった（ $p < .01$ ）。また、人気児は多い傾向にあり（ $p < .10$ ）、無視児は少ない傾向にあった（ $p < .10$ ）。なお、1回目～4回目の合計数についても同様の分析をしたところ、 $\chi^2(4)=134.79$ ,  $p < .001$ で有意となり、人気児、拒否児および平均児の3群は有意に多く（いずれも $p < .01$ ）、無視児と両論児の2群は有意に少なかった（いずれも $p < .01$ ）。

表5 各回のテスト時点における地位群分類の人数内訳（男女全体）

地位群	年中児時点		年長児時点		計
	1回目	2回目	3回目	4回目	
人気児	36(29.0)	41(33.1)	34(27.4)	33(26.6)	144(29.0)
拒否児	32(25.8)	33(26.6)	33(26.6)	29(23.4)	127(25.6)
平均児	30(24.2)	36(29.0)	39(31.5)	42(33.9)	147(29.7)
無視児	19(15.3)	12(9.7)	14(11.3)	17(13.7)	62(12.5)
両論児	7(5.7)	2(1.6)	4(3.2)	3(2.4)	16(3.2)
計	124(100.0)	124(100.0)	124(100.0)	124(100.0)	496(100.0)

( ) 外は人数, ( ) 内は%

## 地位維持者と地位変動者の比較

表6は、1回目（年中児時点の6月実施）の地位分類の結果と2回目（年中児時点の11月実施）の地位分類の結果を組み合わせ、同一地位の維持者および地位の変動者の人数内訳を示したものである。表6の( )内の数値は2回目の地位を基準にして同一地位維持者および地位変動者の比率（％）をあらわしたものである。たとえば、2回目の人気児は41名であるが、その中で1回目も人気児であった者は26名であり、その比率は $26/41$ （63.4％）にあたる。2年目の人気児の中で1年目は拒否児であった者は3名であり、その比率は $3/41$ （7.3％）にあたる。以下同様にして、人数の比率を算出した。なお、表7以後の地位分類表においても、表6と同様に後のテスト時点の地位を基準にして前のテスト時点の地位分類の結果と組み合わせ、同一地位維持者および地位変動者の人数とその比率（％）を算出している。

表6から表11を通して共通していることは、人気児の中では人気児→人気児の同一地位維持者の比率が最も高く、拒否児の中では拒否児→拒否児の同一地位維持者の比率が最も高く、平均児の中では平均児→平均児の同一地位維持者の比率が比較的高いが、無視児の中では無視児



幼児のソシオメトリック地位の2年間にわたる持続と変動

表6 1回目(年中児6月)と2回目(年中児11月)における地位群分類の人数内訳(%)

1回目の地位群	2回目の地位群					計
	人気児	拒否児	平均児	無視児	両論児	
人気児	26(63.4)	1(3.0)	7(19.4)	1(8.3)	1(50.0)	36(29.0)
拒否児	3(7.3)	15(45.5)	8(22.3)	5(41.7)	1(50.0)	32(25.8)
平均児	8(19.5)	7(21.2)	11(30.6)	4(33.3)	0(0.0)	30(24.2)
無視児	4(9.8)	6(18.2)	7(19.4)	2(16.7)	0(0.0)	19(15.3)
両論児	0(0.0)	4(12.1)	3(8.3)	0(0.0)	0(0.0)	7(5.7)
計	41(100.0)	33(100.0)	36(100.0)	12(100.0)	2(100.0)	124(100.0)

表7 1回目(年中児6月)と3回目(年長児6月)における地位群分類の人数内訳(%)

1回目の地位群	3回目の地位群					計
	人気児	拒否児	平均児	無視児	両論児	
人気児	18(53.0)	1(3.0)	12(30.8)	4(28.6)	1(25.0)	36(29.0)
拒否児	5(14.7)	17(51.5)	6(15.4)	4(28.6)	0(0.0)	32(25.8)
平均児	5(14.7)	6(18.2)	13(33.3)	5(35.7)	1(25.0)	30(24.2)
無視児	5(14.7)	7(21.2)	6(15.4)	1(7.1)	0(0.0)	19(15.3)
両論児	1(2.9)	2(6.1)	2(5.1)	0(0.0)	2(50.0)	7(5.7)
計	34(100.0)	33(100.0)	39(100.0)	14(100.0)	4(100.0)	124(100.0)

表8 1回目(年中児6月)と4回目(年長児11月)における地位群分類の人数内訳(%)

1回目の地位群	4回目の地位群					計
	人気児	拒否児	平均児	無視児	両論児	
人気児	20(60.6)	1(3.5)	9(21.4)	4(23.5)	2(66.7)	36(29.0)
拒否児	5(15.1)	17(58.6)	5(11.9)	5(29.4)	0(0.0)	32(25.8)
平均児	2(6.1)	5(17.2)	18(42.9)	5(29.4)	0(0.0)	30(24.2)
無視児	6(18.2)	2(6.9)	8(19.0)	3(17.7)	0(0.0)	19(15.3)
両論児	0(0.0)	4(13.8)	2(4.8)	0(0.0)	1(33.3)	7(5.7)
計	33(100.0)	29(100.0)	42(100.0)	17(100.0)	3(100.0)	124(100.0)

表9 2回目(年中児11月)と3回目(年長児6月)における地位群分類の人数内訳(%)

2回目の地位群	3回目の地位群					計
	人気児	拒否児	平均児	無視児	両論児	
人気児	24(70.7)	3(9.1)	10(25.6)	3(21.4)	1(25.0)	41(33.1)
拒否児	1(2.9)	22(66.7)	5(12.8)	3(21.4)	2(50.0)	33(26.6)
平均児	7(20.6)	2(6.0)	20(51.3)	6(42.9)	1(25.0)	36(29.0)
無視児	1(2.9)	6(18.2)	3(7.7)	2(14.3)	0(0.0)	12(9.7)
両論児	1(2.9)	0(0.0)	1(2.6)	0(0.0)	0(0.0)	2(1.6)
計	34(100.0)	33(100.0)	39(100.0)	14(100.0)	4(100.0)	124(100.0)

表10 2回目(年中児11月)と4回目(年長児11月)における地位群分類の人数内訳(%)

2回目の地位群	4回目の地位群					計
	人気児	拒否児	平均児	無視児	両論児	
人気児	21(63.6)	2(6.9)	9(21.4)	8(47.1)	1(33.3)	41(33.1)
拒否児	2(6.1)	18(62.1)	10(23.8)	3(17.6)	0(0.0)	33(26.6)
平均児	7(21.2)	2(6.9)	19(45.3)	6(35.3)	2(66.7)	36(29.0)
無視児	2(6.1)	6(20.7)	4(9.5)	0(0.0)	0(0.0)	12(9.7)
両論児	1(3.0)	1(3.4)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(1.6)
計	33(100.0)	29(100.0)	42(100.0)	17(100.0)	3(100.0)	124(100.0)

表11 3回目(年長児6月)と4回目(年長児11月)における地位群分類の人数内訳(%)

3回目の地位群	4回目の地位群					計
	人気児	拒否児	平均児	無視児	両論児	
人気児	25(75.8)	0(0.0)	5(11.9)	4(23.5)	0(0.0)	34(27.4)
拒否児	1(3.0)	20(69.1)	7(16.7)	5(29.5)	0(0.0)	33(26.6)
平均児	5(15.1)	7(24.1)	22(52.4)	4(23.5)	1(33.3)	39(31.5)
無視児	2(6.1)	1(3.4)	6(14.3)	4(23.5)	1(33.3)	14(11.3)
両論児	0(0.0)	1(3.4)	2(4.7)	0(0.0)	1(33.4)	4(3.2)
計	33(100.0)	29(100.0)	42(100.0)	17(100.0)	3(100.0)	124(100.0)

→無視児の同一地位維持者の比率が人気児→無視児, 拒否児→無視児あるいは平均児→無視児の地位変動者の比率と同等かそれ以下の比率を示していることである。このことから, 人気児や拒否児は同一地位を維持しやすいが, 無視児では同一地位を維持する者は少なく, 最も地位変動しやすいことがわかる。

### 同一地位維持者率の比較

表12は, 表6～表11の中から同一地位維持者の人数とその比率(%)だけを取り出して, 一覧表にしたものである。表12から, 人気児の地位維持者率は最低の52.9%(1回目→3回目)から最高の75.8%(3回目→4回目)にわたっており, いずれのテスト期間でも第1位の高い比率を示している。拒否児の地位維持者率は, いずれのテスト期間でも人気児の地位維持者率よりも少し低いが, 1回目→2回目を除けば50%以上の比率を示し, 第2位の比較的高い比率を示している。平均児の地位維持者率は, いずれのテスト期間でも人気児や拒否児に次ぐ第3位の比率を示している。

表12の同一地位維持者率を横に, 両論児群を除く他の4群間で比較したところ, 約半年間の期間を経た1回目→2回目では $\chi^2(3)=12.56$ ,  $p<.01$ であった。残差分析の結果, 人気児群では地位維持者率が有意に高く( $p<.01$ ), 平均児群や無視児群では地位維持者率が有意に低かった(いずれも $p<.05$ )。2回目→3回目では $\chi^2(3)=14.73$ ,  $p<.01$ となり, 人気児群の地位維持者率は高い傾向( $p<.10$ )にあるが, 無視児群の地位維持者率は有意に低かった( $p<.01$ )。3回目→4回目でも $\chi^2(3)=14.59$ ,  $p<.01$ となり, 人気児群の地位維持者

率は有意に高く ( $p < .05$ ), 無視児群の地位維持者率は有意に低かった ( $p < .01$ )。

約1年間の期間を経た1回目→3回目では  $\chi^2(3) = 11.11$ ,  $p < .05$  となり, 人気児群の地位維持者率は高い傾向 ( $p < .10$ ) にあるが, 無視児群の地位維持者率は有意に低かった ( $p < .01$ )。同期間の2回目→4回目では  $\chi^2(3) = 21.36$ ,  $p < .01$  となり, 人気児群の地位維持者率は有意に高く ( $p < .05$ ), 拒否児群の地位維持者率も高い傾向 ( $p < .10$ ) にあるが, 無視児群の地位維持者率は有意に低かった ( $p < .01$ )。約1年半の期間を経た1回目→4回目では  $\chi^2(3) = 10.13$ ,  $p < .05$  となり, 人気児群の地位維持者率は高い傾向 ( $p < .10$ ) にあるが, 無視児群の地位維持者率は有意に低かった ( $p < .01$ )。

表12の同一地位維持者率を縦にテスト期間の間で比較したところ, 人気児群では  $\chi^2(5) = 4.61$ , 拒否児群では  $\chi^2(5) = 5.35$ , 平均児群では  $\chi^2(5) = 6.45$ , 無視児群では  $\chi^2(5) = 5.06$ , 両論児群では  $\chi^2(5) = 4.96$  でそれぞれ有意でなかった。5つの地位群のいずれの同一地位維持者率も, テスト期間の相違による変動は小さいことがわかる。

表12 同一地位維持者の人数内訳と比率 (%)

	人気児	拒否児	平均児	無視児	両論児
①約半年間の時間経過					
1回目→2回目	26/41(63.4)	15/33(45.5)	11/36(30.6)	2/12(16.7)	0/2(0.0)
2回目→3回目	24/34(70.6)	22/33(66.7)	20/39(51.3)	2/14(14.3)	0/4(0.0)
3回目→4回目	25/33(75.8)	20/29(69.0)	22/42(52.4)	4/17(23.5)	1/3(33.3)
平均%	(69.4)	(60.0)	(45.3)	(18.6)	(11.1)
②約1年間の時間経過					
1回目→3回目	18/34(52.9)	17/33(51.5)	13/39(33.3)	1/14(7.1)	2/4(50.0)
2回目→4回目	21/33(63.6)	18/29(62.1)	19/42(45.2)	0/17(0.0)	0/3(0.0)
平均%	(58.2)	(56.5)	(39.5)	(3.2)	(28.6)
③約1年半の時間経過					
1回目→4回目	20/33(60.6)	17/29(58.6)	18/42(42.9)	3/17(17.6)	1/3(33.3)
全体平均%	(64.4)	(58.6)	(42.9)	(13.2)	(21.1)

分数表記の分子は同一地位維持者の数, 分母は後回目の地位該当者総数

### 一貫地位維持者率の比較

表13は, 年中児時点の1回目から年長児時点の4回目までのすべてのテスト時点において同一地位に分類された者(連続一貫地位維持者)および4回のうち3回以上にわたって同一地位に分類された者(3回/4回以上の一貫地位維持者)の人数と, それぞれの全体数(N=124)に占める比率(%)を地位群別に示したものである。表13から, 連続一貫地位維持者は人気児群が最も多く, 次に拒否児群, 平均児群となり, 無視児

表13 一貫地位維持者数と全体(N=124)に占める比率(%)

地位群	4回すべての一貫維持者			3回/4回以上の維持者		
	男児	女児	全体	男児	女児	全体
人気児	7	7	14(11.3)	11	14	25(20.2)
拒否児	6	4	10(8.1)	9	11	20(16.1)
平均児	2	3	5(4.0)	9	14	23(18.5)
無視児	0	0	0(0.0)	0	0	0(0.0)
両論児	0	0	0(0.0)	1	0	1(0.8)
計	15	14	29(23.4)	30	39	69(55.6)

群や両論児群では4回とも連続して同一地位を維持した者は皆無であることがわかる。3回／4回以上の一貫地位維持者率では平均児群と拒否児群の順位が逆になっているが、全体の傾向は4回連続一貫地位維持者率の場合とほぼ同様である。

**地位変動者の変動パターンの比較**

表14は、人気児の地位から他の4つの地位のいずれかに地位変動を示した幼児に基づいて、それぞれの地位変動パターンを人数と比率(%)で示したものである。表14から、人気児は無視児へ変動する比率が最も高く、次いで平均児への変動者率が続き、人気児から拒否児へと変動する幼児は極めて少ないことがわかる。この傾向は時間経過が約半年間のように短期間であっても、約1年半のように長期間であっても共通している。両論児への変動者率は高いが、両論児の地位に分類される幼児数それ自体が少ないので、両論児の比率は参考程度に留めておく必要がある。

表14 人気児の地位変動パターンにおける人数内訳(%)

	人気児→拒否児	人気児→平均児	人気児→無視児	人気児→両論児
①約半年間の時間経過				
1回目→2回目	1/33(3.0)	7/36(19.4)	1/12( 8.3)	1/2(50.0)
2回目→3回目	3/33(9.1)	10/39(25.6)	3/14(21.4)	1/4(25.0)
3回目→4回目	0/29(0.0)	5/42(11.9)	4/17(23.5)	0/3( 0.0)
平均%	(4.2)	(18.8)	(18.6)	(22.2)
②約1年間の時間経過				
1回目→3回目	1/33(3.0)	12/39(30.8)	4/14(28.6)	1/4(25.0)
2回目→4回目	2/29(6.9)	9/42(21.4)	8/17(47.1)	1/3(33.3)
平均%	(4.8)	(25.9)	(38.7)	(28.6)
③約1年半の時間経過				
1回目→4回目	1/29(3.4)	9/42(21.4)	4/17(23.5)	2/3(66.7)
全体平均%	(4.3)	(21.7)	(26.4)	(31.6)

分数表記の分子は同一地位維持者の数、分母は後回目の地位該当者総数

表15 拒否児の地位変動パターンにおける人数内訳(%)

	拒否児→人気児	拒否児→平均児	拒否児→無視児	拒否児→両論児
①約半年間の時間経過				
1回目→2回目	3/41( 7.3)	8/36(22.2)	5/12(41.7)	1/2(50.0)
2回目→3回目	1/34( 2.9)	5/39(12.8)	3/14(21.4)	2/4(50.0)
3回目→4回目	1/33( 3.0)	7/42(16.7)	5/17(29.4)	0/3( 0.0)
平均%	( 4.6)	(17.1)	(30.2)	(33.3)
②約1年間の時間経過				
1回目→3回目	5/34(14.7)	6/39(15.4)	4/14(28.6)	0/4( 0.0)
2回目→4回目	2/33( 6.1)	10/42(23.8)	3/17(17.6)	0/3( 0.0)
平均%	(10.4)	(19.8)	(22.6)	( 0.0)
③約1年半の時間経過				
1回目→4回目	5/33(15.2)	5/42(11.9)	5/17(29.4)	0/3( 0.0)
全体平均%	( 8.2)	(17.1)	(27.5)	(15.8)

分数表記の分子は同一地位維持者の数、分母は後回目の地位該当者総数

幼児のソシオメトリック地位の2年間にわたる持続と変動

表15は表14と同様にして、拒否児の地位変動パターンを示したものである。表15から、拒否児も無視児への変動者率が最も高く、次いで平均児への変動者率が続き、人気児へ変動する幼児は少ないことがわかる。特に、約半年間の時間経過では拒否児から人気児へと変動する幼児は少なく、時間経過が長くなるにつれて人気児への変動者率が増加している。時間経過に伴う変動が見られる点で、表14の人気児→拒否児の変動とは異なる様相を示している。

表16は、平均児の地位変動パターンを示したものである。表16から、平均児も無視児への変動者率が最も高い。次いで人気児への変動者率が高く、拒否児への変動者率をわずかに上回っている。しかし、表16の全体平均%からわかるように、どの地位への変動者率も2桁であることから、平均児はいずれの地位へも変動しやすい地位にあるといえる。

表16 平均児の地位変動パターンにおける人数内訳 (%)

	平均児→人気児	平均児→拒否児	平均児→無視児	平均児→両論児
①約半年間の時間経過				
1回目→2回目	8/41(19.5)	7/33(21.2)	4/12(33.3)	0/2(0.0)
2回目→3回目	7/34(20.6)	2/33(6.1)	6/14(42.9)	1/4(25.0)
3回目→4回目	5/33(15.2)	7/29(24.1)	4/17(23.5)	1/3(33.3)
平均%	(18.5)	(16.8)	(32.6)	(22.2)
②約1年間の時間経過				
1回目→3回目	5/34(14.7)	6/33(18.2)	5/14(35.7)	1/4(25.0)
2回目→4回目	7/33(21.2)	2/29(6.9)	6/17(35.3)	2/3(66.7)
平均%	(17.9)	(12.9)	(35.5)	(42.9)
③約1年半の時間経過				
1回目→4回目	2/33(6.1)	5/29(17.2)	5/17(29.4)	0/3(0.0)
全体平均%	(16.3)	(15.6)	(33.0)	(26.3)

分数表記の分子は同一地位維持者の数、分母は後回目の地位該当者総数

表17は無視児の地位変動パターンを示したものである。短期間の時間経過では、無視児は拒否児または平均児へ変動する機会が多いが、時間経過が長くなるにつれて人気児へと変動する比率が高くなっている。無視児は他の地位へ変動しやすい地位にあるが、いきなり人気児へと

表17 無視児の地位変動パターンにおける人数内訳 (%)

	無視児→人気児	無視児→拒否児	無視児→平均児	無視児→両論児
①約半年間の時間経過				
1回目→2回目	4/41(9.8)	6/33(18.2)	7/36(19.4)	0/2(0.0)
2回目→3回目	1/34(2.9)	6/33(18.2)	3/39(7.7)	0/4(0.0)
3回目→4回目	2/33(6.1)	1/29(3.4)	6/42(14.3)	1/3(33.3)
平均%	(6.5)	(13.7)	(13.7)	(11.1)
②約1年間の時間経過				
1回目→3回目	5/34(14.7)	7/33(21.2)	6/39(15.4)	0/4(0.0)
2回目→4回目	2/33(6.1)	6/29(20.7)	4/42(9.5)	0/3(0.0)
平均%	(10.4)	(21.0)	(12.3)	(0.0)
③約1年半の時間経過				
1回目→4回目	6/33(18.2)	2/29(6.9)	8/42(19.0)	0/3(0.0)
全体平均%	(9.6)	(15.1)	(14.2)	(5.3)

分数表記の分子は同一地位維持者の数、分母は後回目の地位該当者総数

変動する幼児は少ないことがわかる。

表18は両論児の地位変動パターンを示したものである。両論児の地位に分類される幼児数が少ないので、どの地位への変動者率も低い。しかし、人気児へ変動するよりも拒否児へ変動する比率が時間経過と共に増加している。両論児は人気児と拒否児の特徴を合わせもつ特異な地位群であるとされているが、表18を見る限り、どちらかと言えば拒否児へ変動しやすい傾向にあるといえる。

表18 両論児の地位変動パターンにおける人数内訳 (%)

	両論児→人気児	両論児→拒否児	両論児→平均児	両論児→無視児
①約半年間の時間経過				
1回目→2回目	0/41(0.0)	4/33(12.1)	3/36(8.3)	0/12(0.0)
2回目→3回目	1/34(2.9)	0/33(0.0)	1/39(2.6)	0/14(0.0)
3回目→4回目	0/33(0.0)	1/29(3.4)	2/42(4.8)	0/17(0.0)
平均%	(0.9)	(5.3)	(5.1)	(0.0)
②約1年間の時間経過				
1回目→3回目	1/34(2.9)	2/33(6.1)	2/39(5.1)	0/14(0.0)
2回目→4回目	1/33(3.0)	1/29(3.4)	0/42(0.0)	0/17(0.0)
平均%	(3.0)	(4.8)	(2.5)	(0.0)
③約1年半の時間経過				
1回目→4回目	0/33(0.0)	4/29(13.8)	2/42(4.8)	0/17(0.0)
全体平均%	(1.4)	(6.5)	(4.2)	(0.0)

分数表記の分子は同一地位維持者の数、分母は後回目の地位該当者総数

## 考 察

### ソシオメトリック地位得点の安定性について

表3から、約半年間の時間経過における各得点の3つの相関係数を平均して高い順に並べると、平均評定値 ( $r = .71$ ) が最も高く、次いでSP得点 ( $r = .70$ )、D得点 ( $r = .62$ )、L得点 ( $r = .60$ ) と続き、SI得点 ( $r = .29$ ) が最も低い。同様に約1年間の時間経過についても各得点の2つの相関係数を平均して高い順に並べると、やはり平均評定値 ( $r = .65$ ) が最も高く、次いでSP得点 ( $r = .59$ )、D得点 ( $r = .55$ )、L得点 ( $r = .47$ ) と続き、SI得点 ( $r = .22$ ) が最も低い。どの得点も約半年の期間から約1年の期間へと期間が長くなるにつれて相関値は低下しているが、得点間の順位は変わらず平均評定値が最も高く、SI得点が他の得点よりも極端に低い。また、期間の長さによる安定性係数の低下は、約半年間から約1年間にかけて顕著であるが、約1年間から約1年半にかけてはほとんど低下していなかった。事実、約1年半の期間にあたる1回目→4回目の相関値が約1年間の期間の相関値よりも有意に低かったのは、平均評定値の相関値だけであった。

Wasik (1987) は、5歳児49名を対象にして5か月間の期間をはさんで各得点の安定性係数を求めている。それによると、平均評定値 ( $r = .80$ ) が最も高く、次いでSP得点 ( $r = .77$ )、D得点 ( $r = .76$ )、L得点 ( $r = .57$ ) の順に低下し、SI得点 ( $r = .48$ ) が最も低かった。この結果は本研究の得点順位とまったく一致している。Poteat, Ironsmith, & Bullock (1986) は3歳～5歳の幼児85名を対象にして、約7週間 (5週間～9週間の範囲) の期間をはさんで

各得点の安定性係数を算出している。その結果によると、SP得点 ( $r = .72$ ) が最も高く、次いで平均評定値 ( $r = .67$ )、D得点 ( $r = .66$ )、L得点 ( $r = .64$ ) と続き、SI得点 ( $r = .43$ ) が最も低かった。この結果は平均評定値とSP得点の順位が本研究と逆であるが、他の得点の順位は本研究と同様である。また、SI得点の相関値が本研究の約半年間の相関値よりも高いが、他の得点の相関値は本研究の相関値とほぼ同程度である。前田 (1989) は約4か月間の期間をはさんで各得点の安定性係数を求めたところ、年中児ではSP得点 ( $r = .72$ ) が最も高く、次いでD得点 ( $r = .72$ )、L得点 ( $r = .55$ ) と続き、SI得点 ( $r = .49$ ) が最も低かった。年長児でもSP得点 ( $r = .72$ ) が最も高く、次いでL得点 ( $r = .70$ )、D得点 ( $r = .59$ ) と続き、SI得点 ( $r = .37$ ) が最も低かった。前田 (1989) では平均評定値の相関値を求めていないが、他の得点の相関値の大きさは本研究とほぼ同様である。これらの先行研究は、いずれも約1か月～5か月の期間にわたる安定性係数を報告したものであり、本研究の約半年間よりも短い期間を扱っている。しかし、本研究の約半年間の相関値はSI得点を除くと、これらの研究結果に匹敵する高い値を示している。したがって、本研究の約半年間の結果はソシオメトリック地位得点の安定性係数について一般的な結果を示すものであると解釈できる。その意味で、約1年間や約1年半の時間経過に伴う各得点の相関値を比較する基準としても十分に使用できると考えられる。

#### 同一地位の維持者率について

表12から、期間の長さにかかわらず、人気児の地位維持者率は53%～76%の高い値を示した。拒否児の地位維持者率は46%～69%の範囲にわたり、人気児の地位維持者率よりもやや低い。しかし、表12の平均%からわかるように全体的に見ると、拒否児の地位維持者率も57%～60%を占め、人気児に劣らず高い維持者率を示している。平均児の地位維持者率は31%～52%の範囲にわたるが、いずれの期間においても平均%は約40%前後である。無視児の地位維持者率はやはり最も低かった。0%～24%の範囲にわたるが、平均%はどの期間も20%を下回っている。前田 (1989)、前田 (1995) の研究Iおよび前田 (1996) は、本研究と同様に幼稚園の年中児時点から年長児時点にわたる約1年間の期間をはさんで同一地位の維持者率を検討している。その結果、前田 (1989) では人気児 (60.0%)、拒否児 (58.3%)、平均児 (33.3%)、無視児 (21.4%) であった。前田 (1995) では人気児 (35.3%)、拒否児 (53.8%)、平均児 (22.2%)、無視児 (20.0%) であった。前田 (1996) では人気児 (52.9%)、拒否児 (56.3%)、平均児 (33.3%)、無視児 (33.3%) であった。これらの先行研究結果と本研究の結果を比較すると、本研究では無視児の地位維持者率が少し低いが、他の地位の維持者率は本研究の結果とほぼ同程度の比率を示している。これらの先行研究結果と本研究の結果を合わせると、幼児期においても人気児と拒否児の地位維持者率は高く、容易に変化しないが、無視児の地位維持者率は低く、短期間でも変化しやすいと指摘できる。

比較的人数の多い人気児、拒否児、平均児の3群について見ると、期間が長くなっても、地位維持者率はあまり低下していない。表12の平均%に基づいて約半年間と約1年間の維持者率の差を算出すると、人気児では11.2%の低下、拒否児では3.5%の低下、平均児では5.8%の低下であった。いずれの低下率も少ないことから、幼児の仲間関係においても、いったん確立した地位は維持されやすく、単に期間が長くなるだけでは容易に変動しないことが示唆される。幼児期における地位の一貫性は表13の結果からも裏付けられる。確かに、4回のソシオメトリ

ック地位すべてに一貫して同一地位を維持した者は少ないが、全対象児の23.4%を占め、約4人中1人の割合に相当する。さらに、同一地位を4回中3回以上維持した者の比率はもっと多くなり、全対象児の過半数を上回る55.6%を占めていた。

本研究の幼児は2年間にわたって同一クラスに所属しているので、クラスのメンバー構成は2年間変わっていない。クラスのメンバー構成の不変性が地位の持続性や一貫性に大きく影響していると思われる。しかし、当該幼稚園を観察する限り、クラスを越えた遊びの交流も盛んであることから、必ずしもクラス単位のメンバー構成の不変性だけが地位の維持者率を高める決定因ではないように思われる。残念ながら、前田(1989)、前田(1995)、前田(1996)の3研究も本研究と同様にクラスのメンバー構成は2年間にわたって同一であったので、クラス・メンバーの不変性がどの程度地位の維持者率を高めているのか明らかでない。これは今後の課題である。

### 地位変動パターンについて

#### (1) 人気児から他の地位への変動パターン

表14の平均%からわかるように、人気児から他の地位へと地位が変動する場合には、人気児→無視児(18.6%~38.7%)または人気児→平均児(18.8%~25.9%)が比較的多く、人気児→拒否児(3.4%~4.8%)は極めて少なかった。人気児→両論児は両論児に分類される人数が少ないので、比率よりも実数を参考にすると、人気児→拒否児の場合とほぼ同程度であるといえる。前田(1989)でも人気児→無視児(28.6%)または人気児→平均児(25.0%)は比較的多いが、人気児→拒否児(0%)は皆無であった。同様に、前田(1995)でも人気児→無視児(30.0%)や人気児→平均児(27.8%)が多かった。しかし、人気児→拒否児(15.4%)の変動者も2名いた。前田(1996)では人気児→平均児(33.3%)が人気児→無視児(25.0%)よりもやや多かったが、人気児→拒否児(0%)は皆無であった。人気児の変動パターンに関する以前の研究結果と本研究の結果から、人気児は無視児や平均児へ変動しやすいが、人気児からいきなり極端な拒否児へと地位を変動する者は少ないと指摘できる。

#### (2) 拒否児から他の地位への変動パターン

表15の平均%からわかるように、拒否児から他の地位へと地位が変動する場合には、拒否児→無視児(22.6%~30.2%)が最も多く、次いで拒否児→平均児(11.9%~19.8%)が多く、拒否児→人気児(4.6%~15.2%)は最も少なかった。しかし、表14の人気児→拒否児の変動者に比べると、逆の拒否児→人気児はやや多いように思われる。特に、約1年間から約1年半へと期間が長くなるにつれて、拒否児の中から人気児へと地位を変動する者が若干増加している。以前の研究結果を見ると、前田(1989)では拒否児→人気児(20.0%)、拒否児→平均児(16.7%)、拒否児→無視児(14.3%)であった。前田(1995)では拒否児→人気児(0%)、拒否児→平均児(27.8%)、拒否児→無視児(30.0%)と本研究と類似した結果を示している。また、前田(1996)では拒否児→平均児(20.0%)であったが、拒否児→人気児(0%)や拒否児→無視児(0%)は皆無であった。このように拒否児から他の地位への変動者率は研究間でいくらか異なっている。この理由の1つは、いずれの研究でも対象児数が本研究の半数程度であり、1人か2人の変動者によって比率が大きく変動しやすいことによると考えられる。たとえば、前田(1989)の拒否児→人気児は20.0%と高いが、実数では15名中3名にすぎない。本研究の対象児数が最も多いことを考慮すると、拒否児は無視児や平均児へと地位を変動しや



すいが、拒否児から人気児へ変動する者は最も少ないと指摘できよう。

(3) 平均児から他の地位への変動パターン

表16の平均%からわかるように、平均児から他の地位へと地位が変動する場合には、平均児→無視児(29.4%~35.5%)が最も多いが、平均児→拒否児(12.9%~17.2%)と平均児→人気児(6.1%~18.5%)はほぼ同程度であった。このことから、平均児は他の地位群と違って、いずれの地位へも変動しやすいと指摘できる。ちなみに、前田(1989)では平均児→人気児(6.7%)、平均児→拒否児(25.0%)、平均児→無視児(35.7%)となり、人気児への地位変動者率が最も低かった。しかし、前田(1995)では平均児→人気児(29.4%)、平均児→拒否児(15.4%)、平均児→無視児(20.0%)となり、人気児への変動者率が最も高かった。また、前田(1996)では平均児→人気児(29.4%)、平均児→拒否児(18.8%)、平均児→無視児(33.3%)となり、人気児への変動者率は無視児に次いで第2位を占めていた。いずれの先行研究結果も、平均児の中には無視児や拒否児へ地位変動する者だけでなく、人気児へ地位変動する者も比較的多いことを示している。

(4) 無視児から他の地位への変動パターン

表17の平均%からわかるように、無視児から他の地位へと地位が変動する場合にも、平均児以上に多様な地位へと変動しやすいと指摘できる。無視児→平均児(12.3%~19.0%)、無視児→拒否児(6.9%~21.0%)、無視児→人気児(6.5%~18.2%)の3つの変動者率はほぼ同程度であるといえる。ちなみに、前田(1989)では無視児→人気児(6.7%)、無視児→拒否児(16.7%)、無視児→平均児(25.0%)となり、人気児への変動者率が最も低かった。しかし、前田(1995)では無視児→人気児(23.5%)、無視児→拒否児(7.7%)、無視児→平均児(5.6%)となり、人気児への変動者率が最も高かった。同様に、前田(1996)でも無視児→人気児(17.6%)、無視児→拒否児(6.3%)、無視児→平均児(13.3%)となり、人気児への変動者率が最も高かった。

以上の地位変動パターンの結果をまとめると、人気児や拒否児は平均児や無視児へと変動するケースが多く、人気児→拒否児や拒否児→人気児は少ないといえる。それに対して、平均児や無視児はどの地位へも変動するケースがあるといえる。特に、平均児→人気児の変動は期間が短くても出現しやすいが、逆に無視児→人気児の変動は期間が長くなるにつれて出現しやすくなるといえる。これらの変動パターンを総合すると、いきなり人気児から拒否児へ変動したり、逆に拒否児から人気児へ変動することは少なく、途中に無視児や平均児の地位を経由して変動していくケースが多いのではないかと考えられる。

## 要 約

本研究では、幼児124名を対象にして、幼稚園の年中児時点から年長児時点にかけて約半年間ずつの期間をはさんでソシオメトリック指名法と評定法を4回実施した。各時点ごとに幼児を5つの地位群に分類して約半年間、約1年間、約1年半の時間経過に伴う同一地位の維持者率を調べ、どの地位群の維持者率が高いかを比較検討した。また地位の変動が生じる場合には、どのような変動パターンが多いのかについても検討を加えた。さらに、5つのソシオメトリック地位得点についても3期間の安定性係数を算出し、幼児を対象とした以前の研究結果と比較検討した。主な結果は以下のとおりであった。

①ソシオメトリック地位得点の安定性係数は、平均評定値が最も高く、次いでSP得点、D得点、L得点と続き、SI得点が最も低かった。

②いずれの地位得点でも約半年の期間から約1年の期間へと期間が長くなるにつれて安定性係数は低下したが、約1年間から約1年半にかけてはほとんど低下しなかった。

③地位分類に基づく同一地位維持者率は、期間の長さにかかわらず、人気児や拒否児が高く、次いで平均児が続き、無視児が最も低かった。

④人気児や拒否児の地位が変動する場合には、平均児や無視児へと変動することが多く、人気児→拒否児や拒否児→人気児の変動は少なかった。

これらの結果は以前の研究結果の一般性を確認するものであり、幼児期においても人気児や拒否児はいったん地位が確立すると維持されやすく、単に期間が長くなるだけでは容易に変動しないことを実証するものである。

#### 引用文献

- Asher, S. R., Singleton, L. C., Tinsley, B. R., & Hymel, S. 1979 A reliable sociometric measure for preschool children. *Developmental Psychology*, 15, 443-444.
- Coie, J. D., & Dodge, K. A. 1983 Continuities and changes in children's social status: A five-year longitudinal study. *Merrill-Palmer Quarterly*, 29, 261-282.
- Coie, J. D., & Dodge, K. A. 1988 Multiple sources of data on social behavior and social status in the school: A cross-age comparison. *Child Development*, 59, 815-829.
- Coie, J. D., Dodge, K. A., & Coppotelli, H. 1982 Dimensions and types of social status: A cross-age perspective. *Developmental Psychology*, 18, 557-570.
- Coie, J. D., Dodge, K. A., & Kupersmidt, J. B. 1990 Peer group behavior and social status. In S. R. Asher & J. D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood*. pp. 17-59. Cambridge: Cambridge University Press. 山崎晃・中澤潤(監訳) 1996 子どもと仲間の心理学—友だちを拒否するところ— pp. 14-62. 北大路書房
- Hughes, J. 1990 Assessment of social skills: Sociometric and behavioral approaches. In C. R. Reynolds & R. W. Kamphaus (Eds.), *Handbook of psychological and educational assessment of children: Personality, behavior, and context*. pp. 423-444. New York: Guilford Press.
- Hymel, S., & Rubin, K. H. 1985 Children with peer relationship and social skills problems: Conceptual, methodological, and developmental issues. In G. Whitehurst (Ed.), *Annals of child development*. Vol. 2, pp. 251-297. Greenwich: JAI Press.
- 前田健一 1989 幼児の仲間関係に関する研究—ソシオメトリック選択の性別偏好と安定性の検討— 愛媛大学教育実践研究指導センター紀要, 第7号, 63-78.
- 前田健一 1995 仲間から拒否される子どもの孤独感と社会的行動特徴に関する短期縦断的研究 教育心理学研究, 43, 256-265.
- 前田健一 1996 幼児の仲間関係に関する研究—社会的行動特徴に関する仲間・実習生アセスメントの縦断的分析— 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学, 42, 2, 79-96.
- McConnell, S. R., & Odom, S. L. 1986 Sociometrics: Peer-referenced measures and the assessment of social competence. In P. S. Strain, M. J. Guralnick, & H. M. Walker (Eds.), *Children's social behavior: Development, assessment, and modification*. pp. 215-284. New York: Academic Press.
- Newcomb, A. F., & Bukowski, W. M. 1983 Social impact and social preference as determinants of children's peer group status. *Developmental Psychology*, 19, 856-867.
- Newcomb, A. F., Bukowski, W. M., & Pattee, L. 1993 Children's peer relations: A meta-analytic review of popular, rejected, neglected, controversial, and average sociometric status. *Psychological Bulletin*, 113, 99-128.

- Poteat, G. M., Ironsmith, M., & Bullock, J. 1986 The classification of preschool children's sociometric status. *Early Childhood Research Quarterly*, 1, 349-360.
- Vitaro, F., Gagnon, C., & Tremblay, R. E. 1990 Predicting stable peer rejection from kindergarten to grade one. *Journal of Clinical Child Psychology*, 19, 257-264.
- Wasik, B. H. 1987 Sociometric measures and peer descriptors of kindergarten children : A study of reliability and validity. *Journal of Clinical Child Psychology*, 16, 218-224.

付記 本研究は文部省科学研究費補助金基盤研究C-2 課題番号08610135 (平成8年度～平成10年度)の援助によるものである。本研究の資料収集にあたり快くご協力下さいました愛媛大学教育学部附属幼稚園の先生方と園児の皆さんに心からお礼申し上げます。また、資料収集と整理にあたって援助してくれた大学生の皆さんに感謝します。